

# イベント型オリンピック教育「とうがく競技祭」の実践

## —古代スタディオン走実施までの取り組み—

木村華織\*

### 1.はじめに

本報告は、本学スポーツ健康科学部で行ったイベント型オリンピック教育「とうがく競技祭2014」（以下、イベントとする）について報告するものである。本イベントでは、実行委員としてイベントの企画・立案および当日の運営を行った2年生に対する教育実践と、イベント当日に選手として参加した1年生に対する教育実践を試みた。本報告では、実行委員に対して行った教育実践のうち、古代スタディオン走担当学生の活動について報告する。以下に、競技祭を実施するに至った経緯を述べる。

2013年9月7日に開催された第125次国際オリンピック委員会（IOC）総会において、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催都市が東京に決定した。これを受け、2014年6月23日には東京大会組織委員会と全国の大学・短期大学が連携協定（以下、大学連携協定とする）を締結した。大学連携協定では、2020年の大会に向けたオリンピック・パラリンピック教育の推進が柱になっているほか、グローバル人材の育成、パラリンピックの理解促進、広報活動、イベント開催など、各大学の特性を活かした取り組み等を進めていくことが求められている。本学も2014年7月に組織委員会との大学連携協定を締結し、オリンピック・パラリンピックムーブメントを推進するための活動に着手することとなった<sup>1)</sup>。そこで本学スポーツ健康科学部では、従来の学部行事で行ってきた「運動会」を古代・近代オリンピックの要素を盛り込んだオリンピック関連イベントにすることで、身体活動を通じたオリンピック教育を目指した。

日本におけるオリンピック教育の実践は、1964年の東京オリンピックから開始され、この時にはオリンピック学習読本が作成・頒布された。学習読本利用したオリンピック学習やオリンピックに関する作文の作成、大会見学等が行われるなど、これらの試みは世界初のオリンピック教育といわれている。また、1998年長野冬季オリンピックの際に行われた「一校一国運動」は、オリンピックのホストシティーを中心に今なお継続して行われているオリンピック教育実践のひとつである。他方、近年では、中学校・高等学校の新学習指導要領保健体育「体育理論」の一部にオリンピックについて学ぶことが明記され、学校現場で実践できる事例も求められている。

小中高等学校や特別支援学校を対象とした実践については、2010年に設立されたオリンピック教育プラットホーム（CORE:Center for Olympic Research and Education、以下COREとする）の主導のもと、筑波大学の附属学校を実践フィールドにした事例が数多く紹介されている<sup>2)</sup>。また、CORE設立以前から行われている学校現場での実践としては、中学校を対象とした吉中らの実践<sup>3)</sup>、小学校を対象とした井上の実践<sup>4)</sup>があげられる。一方、大学生を対象とした国内での実践はほとんどなされていない。イベント型オリンピック教育の実践については、国際オリンピック委員会（IOC）から出されているOVEP（Olympic Value and Education Programme）<sup>5)</sup>の教員・指導者向けツールキットに紹介されているものの、これらの実践を大学の学部規模で行った報告はみられない。

\*東海学園大学スポーツ健康科学部助教

そこで本学では、オリンピックの要素を盛り込んだスポーツイベントの開催を通して、学生たちへのオリンピック教育を試みることにした。また、本学の試みは、当日参加するというだけでなく、1年生に対してはイベント開催前に90分の知識学習の場を設けた。実行委員である2年生の場合には、春学期開講の「体育史」を受講することで、古代・近代オリンピックの歴史やオリンピック・ムーブメントに関する基礎的な知識学習を行ったのちに実行委員として活動するというプロセスを経た。

以降、本稿では、イベント開催までの実行委員の活動内容について報告し、活動を通して得られた教育効果について検討する。特に本稿では、筆者の受け持つゼミナールが担当した古代スタディオン走を中心に報告する。

## 2. オリンピック教育とは

IOCが進める「オリンピックの価値教育プログラム (OVEP)」においては、オリンピックの教育的価値として以下の5つの価値が示されている (Binder, 2007)<sup>6)</sup>。「努力から得られる喜び (Joy of Effort)」「フェアプレー (Fair Play)」「他者への敬意 (Respect for Others)」「向上心 (Pursuit of Excellence)」「体と頭と心のバランス (Balance between Body, Will and Mind)」である。COREは、これらの価値観を備え、スポーツを通して国際平和に寄与し得る人材を育成することがオリンピック教育の目標だとしている。また、舩本 (2012) はオリンピック教育の守備範囲を、(1) オリンピックについて学ぶ「知識学習」、(2) オリンピックを通して学ぶ「体験学習」、(3) スポーツ実践の中でオリンピズムを学び、身につける「実践学習」の3つに整理している<sup>7)</sup>。本イベントは、このうち「知識学習」と「体験学習」を盛り込んだオリンピック教育に位置づけられる。

## 3. イベント型オリンピック教育：「とうがく競技祭2015」の目的

上述のオリンピック教育の目標を参考に、イベント開催の目的として以下の2点を設定した。ひとつは「オリンピックへの理解促進」である。具体的には、オリンピック・ムーブメント、オリンピズム、オリンピックの教育的価値について知り、体験や実践を通してスポーツやオリンピックの教育的・社会的価値への理解を深めること、である。もうひとつは、「保健体育科教員養成課程認定校として学校現場で用いることのできる実践事例を学生たちに体験してもらうこと」である。自らがオリンピック教育を経験することは、オリンピック・ムーブメントを理解するきっかけ作りでもあり、保健体育科教員を目指す学生たちが学校現場で活用できる実践モデルを提示するという意味も含んでいる。

## 4. 「とうがく競技祭2014」の概要

### (1) 実施場所及び時間

場所：東海学園大学三好キャンパス 第1グラウンド

時間：9時30分 開会セレモニー開始

集合：実行委員→8時集合、1年生→9時集合 (ゼミごとに出席確認)

### (2) 参加者

1年生：約280名 (1学年全員)

2年生：70名 (実行委員：4つのゼミナール学生+有志学生)

本学部の教員及び三好キャンパスの職員：約35名 (全教員+一部の職員)

### (3) プログラム

イベントのプログラムは、各競技のオリンピックにおける歴史的背景を踏まえ、オリンピックの教育的価値について学びやすい競技種目を選定した。また、本学部が行っている学部行事の目的のひとつには、学生同士の交流や結束力を深めることも含まれているため、従来の「運動会」で用いていた方法を継続するかたちで、1年生280名を4つ団に分けて団別対抗戦形式を採用した。当日のプログラムは、以下の通りである。実施競技の選定理由については、木村・黒須らの報告<sup>8)</sup>を参照のこと。

#### プログラム

1. 9:00 学生集合・点呼・キトン配布（古代ギリシャの生活着）
2. 9:30 開会式 [本イベントの目的、準備体操、選手宣誓、諸注意等]
3. 10:00 古代スタディオン走 [全員参加：レースは男女別]
4. 11:00 綱引き [男女混合：1チーム男子20名、女子10名]
5. 11:30 昼食
6. 12:30 芸術競技・ダンス [全員参加：当日実行委員が振付を教示し全員で躍る]
6. 13:00 団別対抗リレー [男女混合：1チーム男女8名ずつ、走順自由]
7. 14:00 閉会式 [結果発表、オリーブの葉冠授与、講評等]

## 5. イベント当日までの実行委員全体の動き

### (1) カリキュラム上の位置づけ

このイベントでは2年生が実行委員として企画・運営にあたっているが、これらの一連の準備は、基本的に2年次秋学期開講の必修演習科目「専門基礎演習Ⅱ」の授業内で展開した。イベントの企画・運営を担当したゼミナールは4つあり、それらのゼミナールは「専門基礎演習Ⅱ」のシラバス上において、イベントの企画・運営を中心に活動を行う演習として位置づけられている。運営は1つのゼミナールで1つの競技を担当するようにした。

### (2) 活動スケジュール

イベント準備期間として、約10週分（90分×10）あてた。授業時間外で準備をしている係もあったことから、実質的には10週分以上の準備時間を要したといえる。イベント終了後は、イベント開催までの活動内容と今後の課題等をまとめる作業を行い、最終的に各係の活動内容をレポートにして提出した。イベントに関わるスケジュールは以下の通りである。

イベント準備：2014年9月30日（火）～11月19日（水）

前日準備：2014年11月19日（水）

イベント日時：2014年11月20日（木）

事後活動：2014年11月25日（火）～1月13日（火）

### (3) 実行委員の活動概要

実行委員の主な活動として、1) 各競技のルール決定、2) 用器具の準備・製作、3) 当日の運営マニュアルの作成、があげられる。4) ゼミナール全体では、全2回の全体ミーティング（1回目：目的と役割の確認、2回目：各競技の進行方法・ルールの確認）及び1回の全体リハーサルと前日準備を

行った。それ以外は、基本的に各ゼミナールで準備を進めた。

## 6.古代スタディオン走担当ゼミナールでの活動

以降では、古代スタディオン走について、企画、準備段階から当日の運営までの活動内容を報告する。

先に述べたように、実行委員学生は2年次春学期開講の「体育史」において、古代オリンピック競技祭と近代オリンピックに関する基礎的学習を行っている。古代オリンピック競技祭を扱う講義では、古代ギリシャの四大競技祭やオリンピック競技際の起源、そこでの競技種目について学び、古代スタディオン走については、スタート方法やルール（フライングしたらムチ打ちの制裁をうけたこと）等も取り上げ説明を行った。その他に文献に記載された再現図、オリンピックの遺跡にあるスタートラインの写真、ネメア祭（古代四大競技祭の復活祭）で使用されていたヒュスプレクス（スタート装置）の写真を用いて説明を行った。また、より古代へのイメージを深めるため、DVD教材「古代オリンピックとは？～2500年前のアスリート～」（BBC製作）と筆者がネメア祭で撮影した映像を視聴した。

競技祭を開催するにあたって本ゼミナールに与えられた担当は「古代スタディオン走」と「開閉会式」の企画・運営であったが、今回の報告では紙幅の関係から、古代スタディオン走を中心に報告し、開閉会式については巻末資料として学生たちの報告を紹介するに留める。

### （1）役割分担と具体的な活動

古代スタディオン走及び開閉会式を運営するにあたり、15名のゼミ生を2つのグループに分け、続いて古代スタディオン走担当学生を「ヒュスプレクス制作」、「審判」「招集」の3つに役割分担した。全体の統括は、ヒュスプレクス制作担当の学生が兼任した。各係の当日までの作業内容及び当日の活動を表1に示す。活動内容の詳細については、学生がイベントの事後作業としてまとめたレポートを転記するかたちで報告する。

表1. 古代スタディオン走担当学生の役割別の主な活動

役割	事前作業	当日
ヒュスプレクス制作	ヒュスプレクスの製作方法の検討 ・ヒュスプレクスの組立て方 ・スタート紐の落とし方 製作のための材料の買いだし 製作	スターター ルール説明
招集	出場選手の組・コース分けの検討 スタートリストの作成 招集方法の検討	招集場所の設置 出場選手の招集・整列 スタート地点への誘導
審判	ルールの検討 ・1レース何コースで行うか ・フライング者への対応 順位の判定方法の検討 得点集計・本部への連絡方法の検討	ゴールでの順位判定 得点集計 集計点の本部への連絡
全員	コースの設置（前日準備） ・コースのライン引き（ビニール紐使用） ・ヒュスプレクスの組立て・設置	ヒュスプレクス、コースの撤去

## a) ヒュスプレクス制作係（担当4名）

## ①当日までのプロセス

- 競技者の人数を調べ、組数・1レースの人数を決める（1レース16人、18組）
- 距離を決める→70mに決定
- スタート装置（ヒュスプレクス）の作り方を考える
- スタート紐の落とし方を考える（同時に16レーン分のスタート紐が落ちるように）
  - 1回目の案：両端の木を倒してスタートする→危険なため却下
  - 2回目の案：ヒモをおもりで落とす→採用
- 1本1本の木の立て方
  - 1回目の案：木を水の入ったペットボトルで囲み安定させて立てる→却下
  - 2回目の案：ハードルの上を取り、木をテープで括り付ける→採用
- 組立・リハーサル
 

実際に組み立て、本当に競技として成立するのか確認。

スタート紐が真ん中でたるむのを防止するために中心に誰も走らないレーンを作り  
り下図1のように補強した。

## ②準備物

- 太い木（スタート両端用木材）×4
- 細い木（レーン分用木材）×17
- ハードル×17台
- ポリエステルロープ50m（スタート用）×2
- レーン分ビニールロープ300m×5
- ゴール用木材×2
- 塗料（木に色を付ける）

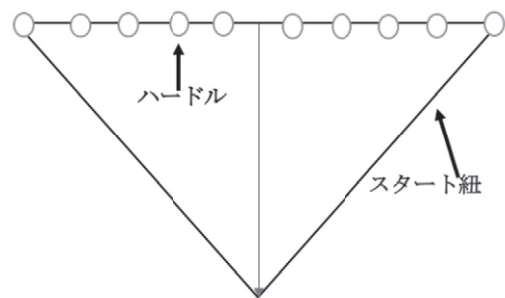


図1. ヒュスプレクスの製作案

## ③当日の運営方法

スタートのヒモを持つ人、真ん中の空白レーンに立つ人（ヒモのたるみを確認し、スタート準備完了の合図を出す）、スタート地点の両端でヒモの管理をする人の4人でスタートを行う。審判、召集の人と連携することにより、競技が円滑に進む。

## ④次回に向けての改善点

- ヒモの位置が低く、走者が下を向かなければならなかった
  - もう少し高い木を使用することで胸の位置までヒモを上げることができる
- スタート装置自体の強度を強める
  - 後半木が曲がったりしてきた
- 審判との距離が遠く連携を取りにくかった
  - トランシーバーなどが使えるともっとやりやすい
- フライイングの徹底
- ヒモの管理の方法を変えなければ、毎回絡まりをほどくのにかかり過ぎた



写真1. ヒュスプレクス製作風景

b) 招集（担当4名）

①当日までのプロセス（タイムスケジュール）

表2. 招集系のイベント当日までの活動概要

日にち	活動内容
10/14（火）	4人で手分けしてプログラムを作る。（青団・黄団・白団・赤団） ※27日（月）に1年生が出場種目を決定する為その時にプログラムを配れるように作成
10/25（土）	スタートリスト作成完了
10/27（月）	スタートリストを1年生の各ゼミ担任に配布
10/28（火）	招集方法を考える（整列・点呼を手分けして行うと効率がよい） 他の部署を手伝う（スタート装置）
11/4（火）	合同ゼミナール（細案の確認）
11/11（火）	全体リハーサル（グラウンドにて実施：招集の一連の流れを確認） ・コーンの置く場所 ・1年生を並ばせる方向 ・プログラム表を張る位置 ・名簿を見て1年生の出場確認方法 ・スタート位置までの流れ方 ・走り終わってから応援場所の設置 ・スムーズに1年生を並ばせる方法 ※このリハーサルである程度の流れを決定させる
11/18（火）	各種目の最終調整 召集班はある程度シミュレーションを踏まえ話し合い、当日の個人の動き、全体の動きの話し合いをする。また、当日は他のゼミの人や有志の人が手伝いに来てくれるため、その人たちを当日どのように指示するか話し合う。 ↓ 終わり次第、ヒュスプレクスの手伝いに回る
11/19（水）	前日準備 ・前日準備では当日1年生に並ぶ場所をわかりやすくするため、色つきのコーンを並べ、そこに番号を貼る作業をする ・走り終わってからコースに侵入しないようコーンで仕切りを立てる
11/20（木）	とうがく競技祭2015 当日

②準備物

[整列時]

- ・ カラーコーン（16個）→召集場所での整列時に使う
- ・ レーン番号の紙（16番まで）→整列時にわかりやすく並ばせるため

[応援場所の仕切り]

- ・ カラーコーン（10個程度）→走り終わった選手がレーンに入らないよう仕切りを作る

- カラーコーンに乗せるバー（6本）→すべてのコーンには乗せず所々に乗せる

#### [スタートリストの掲示]

- ネット（2つ）：陸上競技場にある緑の大きなネットを使用  
→各レースの走順・各レーンを記したスタートリストを貼るため

#### [当日使うもの]

- 拡声器（3つ程度）→1年生を並ばせる時に使用
- 名簿（4個）→選手確認の為に使用

#### [その他]

招集係の準備は、当日に行うものが多いため、コーンやネットなどは当日までに数があるかどうか確認し、当日使えるように確保しておくことが必要である。

### ③次回に向けての改善点

- カラーコーンに貼る番号を見やすくする
- 召集するとき全員一斉に並ばせず1部・2部と分ける
- 事前に負傷者・欠席者などの参加しない選手を確認する
- 1年生がどこに、どのように並ぶのかなど伝えておく

## c) 審判（担当3名）

### ①当日までのプロセス

- どのように判定をするのかを大まかに決め、得点表などを作成した。
- 判定のシミュレーションを行った  
→シミュレーションでは、実際に数名に走ってもらった。その結果、様々な課題がでてきた。それは、判定の仕方、判定する人の人数、結果が出た後、走り終わった人はどうするのか、並ばせるのか、解散させるのかである。
- 上記の課題をどうしていくかを話し合い、課題の解決に取り組んだ。  
→自分たちが考えているよりも意外と大変であることが実際にやってみないとわからないため、ほかのゼミの人達に協力してもらいなりして何度か実際にやってみることが一番だと思う。  
→シミュレーションをして分かったことは、少し高い位置から見たほうが判定しやすいということ。また、IphoneやIpadを使ってスローの映像を残しておけば目視では分かりにくいときに判定できるのではないかということだった。適当に走るのと真剣に走るのでは判定のしにくさがまるで違う。選手が真剣に走ってくれば来るほど判定しにくくなるのが分かり、それに対応する工夫が必要であると感じた。



写真2. 判定係シミュレーション

### ②準備物

- 判定用の審判台→バレーの審判台
- 判定用カメラ→Iphone
- レーン番号用紙→1～16の番号を書いた紙
- 上位者待機コーン→順位の書いた紙を貼ったコーン
- 得点表

### ③当日の運営方法

当日になり実際に大勢の人が真剣に走ってくると練習のときのようにはいかず、最初の何組かは判定に戸惑った。そのため、急遽順位の判定方法を変更した。当初、審判員はゴールの両端に分かれて、片側は1位と2位、反対側は3位と4位を目視で判定する方法を採用していたが、途中から審判1人がひとつの順位を担当し、判定する方法に変更した。判定方法の変更により、それまでぼやっと見ていたものが、担当する順位だけに集中できるようになり、正確で効率の良い判定ができるようになった。

また、各レーンのゴール後ろには、古代スタディオン走担当以外のゼミの実行委員（補助者）に並んでもらい、ゴール後、走ったレーンに留まるよう選手に指示をしてもらった。補助者の人数が多く確保できたため、審判の順位判定を選手に伝える人、上位入賞選手を誘導する人、点数をつける人、というように役割分担をして審判業務にあたることができた。これにより、判定作業がスムーズできるようになった。さらに、順位の判定は目視だけでなく、判定が難しくなった場合を考えて、Iphoneによる撮影も行っていた。これは複雑な判定を正確に行うことにつながるため、少し判定に時間を要することにはなるが、毎回記録しておくほうが重要である。

### ④次回に向けての改善点

- 事前のシミュレーションでは、レース同様の16人に走ってもらう中で判定をすることがなく、実際のレースに近いシミュレーションができていなかった。この点は大きな反省点である。次回ではできるだけ本番に近いかたちでシミュレーションを行うことが必須である。
- 走者が何レーンを走る走者なのかをゴール後に瞬時に判断し難かった点である。レーン番号は掲示していたが、張り出した場所が適切ではなかった。陸上競技場のように、ゴールラインのすぐ後ろにレーン番号がついていると、判定の公正さと効率化につながると思う。
- ゴールの位置が分かりにくい部分があったため、走ってきた選手がゴールを誤るケースが多く見られた。明確にゴールを示す目印等を準備する必要がある。

今回のイベント開催にあたっては、事前のシミュレーションが不足していた点は否めない。当日どうかこの状況乗り越えられたのは、審判担当者が臨機応変に対応することができたことと、他のゼミの補助者が状況みて迅速に動いてくれたことが要因であると思う。次回は、より入念なシミュレーションをおこなうことと、事前に多くの審判補助者を準備しておくことが必要であると感じた。

### (2) 前日準備

前日準備は、4ゼミ全ての実行委員で準備を行った。グラウンドを使用するクラブの関係から、会場設営はクラブ活動終了後18:00より行った。前日に行った会場設営等の準備は、以下の通りである。

- 古代スタディオン走のヒュスプレクス設置
- 古代スタディオン走のレーン引き（ビニール紐を使用、70m×16レーン分を準備）
- テント張り（本部2機、救護1機）と机・椅子の設置
- 当日使用する用器具（綱、音響、マイク、ブルーシート、得点板）の準備
- 整列用のコーン（ゼミ名を記載した紙をコーンに貼ったもの）
- リレー用のマークづけ



ここでは、古代スタディオン走のレーン引きに苦戦した。スタートからゴールまでの約70mに渡ってビニール紐を引くことに加え、レーン間隔をできる限り均一にすること、風によってズレが生じないこと、両端に錘をつけてレーン紐の弛みをなくすことなど等、実践してみることで生じるたくさんの課題がみえてきた。事前に数レーンのみ引くシミュレーションはしていたものの、全16レーン分、全長70mのレーン引きはこの日が初めてだったため、予想以上の時間がかかってしまった。



写真3. 前日準備（古代スタディオン走のレーン作り）

## 7. イベント終了後の学生たちの声（競技祭の実行委員を経験して）

イベントの企画・運営活動によって学生たちが何を感じ、何を学び得るのかを知るために、イベントの翌週のゼミナールにてアンケート調査を実施した。この結果から、本イベントがオリンピック教育の教材として適切なのかどうかを検討してみたい。

アンケート調査は、全実行委員学生70名のうち60名に対し行い回答を得た。回答を得られなかった10名は、有志として実行委員に加わった学生であったため、ゼミナール内での調査がかなわなかった。本報告では、古代スタディオン走を担当した学生の回答のみを紹介する。アンケートの内容は以下の通りである。

### （1）アンケート項目の概要

調査用紙は、7段階リッカート尺度で問うものと自由記述で問う2種類で構成した。7段階尺度では、主にイベントの運営にたずさわった感想とオリンピズムやオリンピック教育への理解・関心を問うた。自由記述では、イベントの企画・運営を通して感じたこと、次年度への提案等を問うた。

### （2）自由記述の内容から読み取れること

ここでは、自由記述で得られた回答を紹介し、実行委員学生が一連の活動を通して何を感じ、学び得ているのかを検討してみたい。表2に「競技祭の企画・運営を担当してどのようなことを感じましたか」という問いに対する回答をまとめた。本ゼミナールでは、古代スタディオン走と開閉会式の2つの企画・運営を担当したことから、ここでは参考までに開閉会式の回答も含め表に列記する。

古代スタディオン走担当の実行委員からあげられた内容をまとめてみると、主に次の4点にまとめることができた。1) 達成感、やりがいがあった、良い経験になった、2) イベントを運営することの難しさや大変さが分かった、3) 仲間と協力することの大切さを感じた、4) オリンピックに興味をもてた、である。ここでは回答の多かった順にその内容を示したが、この傾向は他の競技を担当した学生にも共通していた。このように、イベント開催までの一連の活動の中で学生が感じ、学び得たことは、直接的にオリンピックに関わることよりも、行事の企画・運営そのものを通して学び得たものが中心で

あった。

その他に、古代スタディオン走担当者にみられた特徴としては、「仲間と協力することの大切さ」をあげる学生が他の競技担当者よりも多いことである。その理由としては、古代スタディオン走を誰1人経験したことがなかったこと、ヒュスプレクスの製作など、仲間とともに考え、試行錯誤しながら進める作業が他の競技よりも多かった点が影響していると考えられる。提示された達成課題が困難であるほど、協力することの大切さを見出す傾向があることが読み取れた。また、回答内容を文章全体の文脈から捉えてみると、古代スタディオン走担当学生の文章は、「大変さ、困難さ」→「達成感、やりがい」→「仲間との協力」というように展開されていた。学生の回答内容を以下に示す。

1つのものを作り上げるといのは大変なことなんだと感じた。だからこそ、終わった後、達成感が得られると思うし、1つ成長できるのではないかと思った。企画運営の中で協力してやることが一番大切なのかなと感じた。今後絶対に生きてくる活動になったと思う(表3。古代スタディオン走担当No.1)。

自分たちで企画・運営することの難しさとやりがいを肌で感じることができた。また、当日にならないと気づくことができなかつた課題が多くあって一人の力ではできないこともみんなの力を借りて解決できた(表3。古代スタディオン走担当No.4)。

これらの回答内容からは、体験活動を経ることによって学びが展開していき、学習が段階的に深められていく様子がうかがえた。



写真4. シミュレーション時の打合せ



写真5. イベント当日の実行委員

表3. 自由記述の回答内容

No	Event	Q. 競技祭の企画・運営を担当してどのようなことを感じましたか。
1	Stadion	1つのものを作り上げるといのは大変なことなんだと感じた。だからこそ、終わった後、達成感が得られると思うし、1つ成長できるのではないかと思った。企画運営の中で協力してやるのが一番大切なのかなと感じた。今後絶対に生きてくる活動になったと思う。
2	Stadion	何も分からない「ゼロ」からのスタートだったけど、みんなで協力して知恵を出し合い作り上げ、競技祭が成功したときの達成感は気持ち良かった。
3	Stadion	最初はどうなるか不安だったけど、本番ではすごく上手くいきとても楽しかったです。来年もできればやりたいなと思いました。
4	Stadion	自分たちで企画・運営することの難しさとやりがいを肌で感じることができました。また、当日にならないと気づくことができなかった課題が多くあって一人の力ではできないこともみんなの力を借りて解決できた。
5	Stadion	正直運営をやると思った時面倒くさいと感じていました。準備期間や本番を通して、今思えばとても楽しく、充実した運動会でした！！是非、来年も続けて欲しいです。
6	Stadion	初めて行う種目だったので、準備から試行錯誤で大変だったが、複数人で考えれば良い案が出てくるため、協力して行うことが大切である。また、前日、当日の準備も他のゼミに協力をしてもらったことで成功したと思う。1年生も楽しんで競技際に参加していたと思うので、企画・運営を担当して良かった。
7	Stadion	競技祭を通して、企画・運営をすることの大変さと楽しさを学ぶことができた。スタディオオン走に関しては初めての挑戦で大変だったが、運営委員みんなで協力できて、良い経験になった。
8	Stadion	まず、オリンピックに興味を持つことができた。色々な知識を得ることができた。この企画を次に繋げていきたい。
9	Stadion	1から自分たちで考えて行動することがとても難しかった。当日の1年生の動きが分からなかったが、たくさんのパターンをみんなで考えるという作業が良かった。
10	Ceremony	どの大学もいまだかつてやったことのない、古代スタディオオン走という競技を一から考えて、みんなで協力して1つのものを創り上げる大変さ、すばらしさを実感した。大変だったけど、終わった後、1年生が楽しかったと言ってくれて嬉しかった。
11	Ceremony	葉冠づくりなど難しかったけど、作ったことがないから経験できて良かった。自分たちで考えるのは難しいことが分かった。
12	Ceremony	はじめて運営をやって、大変なこともあったけれど達成感がすごいあった。今後、この経験を教職の現場で生かしたい。
13	Ceremony	すごく楽しかった。
14	Ceremony	普通の運動会ではなく、古代オリンピックの要素を取り入れ、スタディオオン走やダンスという本番本当にうまくいくのかという不安を感じながらやっていたが、他のゼミの方々とも協力をし、成功に終わったと思って、本当に嬉しかった。

## 8.おわりに

本稿では、オリンピック教育の実践活動として行ったイベント型オリンピック教育「とうがく競技祭」開催までの一連の活動内容について、古代スタディオオン走を担当した実行委員の活動に焦点をあて報告を行った。

本イベントは、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた大学連携協定事業のひとつであり、また本学初の大規模なオリンピック教育の実践でもあった。しかし、オリンピック教育に関する十分な知識がない中でスタートを切った本学部の取り組みについては、オリンピック教育としての適切な教育効果が得られるのかなど、不安要素があったのも正直なところである。特に古代スタディオオン走のヒュスプレクス製作については、筑波大学の附属高校での実践はあるものの、16レーン分を製作すると

いうものは前例になかった。それゆえに、彼ら自身の調べ学習やシミュレーションもかなりの時間を割いて行われていた。ヒュスプレクス製作係以外の係も、参加者280名をどのような招集・誘導し、判定するかも大きな課題となった。なぜなら、280名が参加するこの競技の全行程を30分以内に終えることがプログラム上の条件として課されていたからである。こうした課題を解決するための仲間との取り組みが、自由記述であげられた「達成感、やりがいがあった」、「イベントを運営することの難しさや大変さが分かった」、「仲間と協力することの大切さを感じた」などの言葉に繋がったのであろう。

では、スポーツイベントを教材に用いた「とうがく競技祭」のオリンピック教育としての教育効果や教材としての有効性は如何なものだったのであろうか。本稿のまとめとして、学生たちからあげられた自由記述の回答から、本イベントの教育効果と教材としての有効性を考えてみたい。

自由記述には、「オリンピックに興味を持つことができた」というコメント以外に、オリンピック、オリンピズム、オリンピック教育などの文言は出てこなかった。一方、本稿において報告することができなかったが、オリンピック理解を問うた7段階尺度による設問では、1年生に比べ、2年生は「オリンピズムに関心が持てた」「オリンピック教育に関心が持てた」「オリンピック教育体験は将来役に立つ」の項目で、高い値を示していた。このことは、当日参加するだけの1年生に比べ、オリンピックやオリンピック教育に対して興味を持った学生が2年生に多くいたことを示していた。

他方、自由記述であげられていた内容は、「はじめに」で紹介した「オリンピックの教育的価値」に近い価値であった。特に今回の活動からは、オリンピックの教育的価値のうち「努力から見出される喜び」、「他者への敬意／尊重」に近い言葉が多くみられた。これ以外にも「その他」として設けた欄には、次のような言葉が記されていた。

主体的に取り組めば、それだけ大きなものが得られると思う。みんなの姿を見ていて、この子はこういうところに長けているんだなあとか、見習いたいところだなあとか、そういう部分が多くみられたことが自分の刺激になった。思ったより時間がかかるので、協力してみんなでやるのが大切だと思う。

以上、本学部で行ったオリンピック教育への試みは、改善点は多くあるが、少なくとも学生たちが勝つことだけではないオリンピックの意義やオリンピック教育という言葉を知り、実施した競技のオリンピックにおける歴史を学ぶ機会にはなった。そして、前例のないイベントをつくる中で、彼らなりに思考と議論を繰り返すという取り組みが、オリンピックの教育的価値に近い価値を彼らの中に導き出したのであろう。

## 9. 参考資料

以下の資料を巻末に添付する。

- ・巻末資料1：古代スタディオン走細案
- ・巻末資料2：開閉会式細案及び葉冠作成について
- ・巻末資料3：古代スタディオン走担当者の当日までの活動スケジュール

## 参考文献・注

- 1) 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を結んだ短期大学・大学は、連携に向けたコメントをそれぞれ発表している。東海学園大学は2014年7月に組織委員会

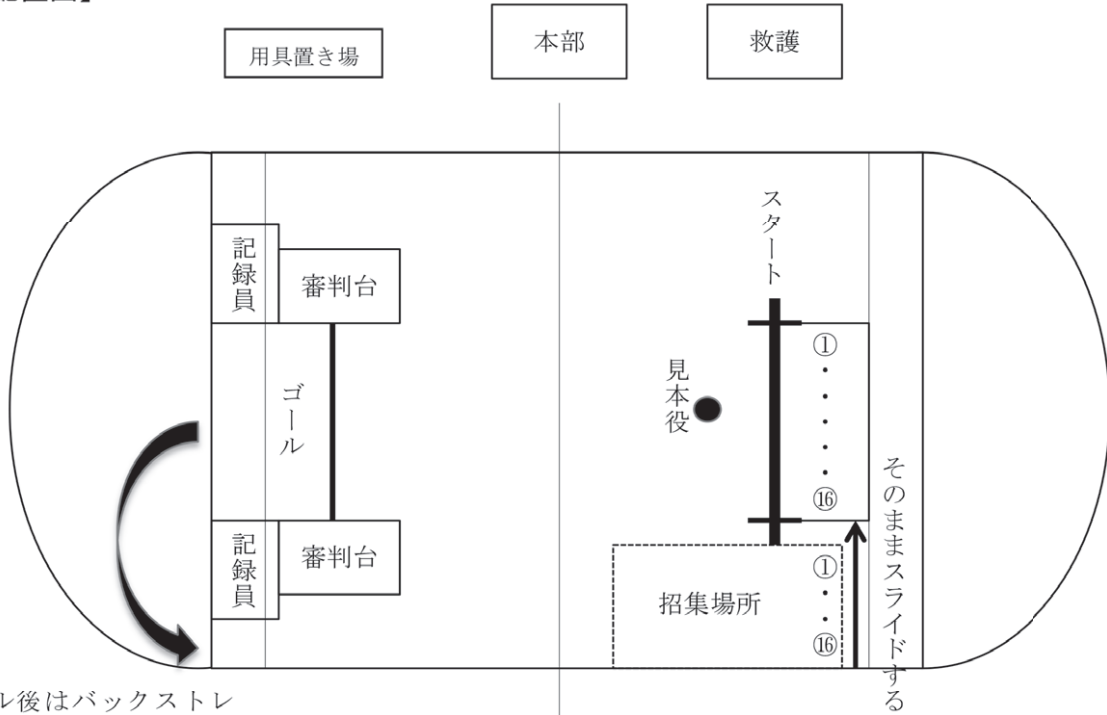
との大学連携協定を締結し、「スポーツを通じた人間教育を支援し、本学の教育理念である『共生（ともいき）』を実践する」ことをコメントとして発表している（TOKYO 2020ホームページ大学連携協定締結校コメント一覧参照）。

- 2) オリンピック教育プラットフォーム（CORE）は、2010年12月に設立された日本で唯一のIOC認定オリンピック研究センターである。筑波大学を拠点に11の附属学校と連携して、オリンピック教育に関する理論的研究と教育実践を推進している。<http://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/>（2015年9月15日現在）
- 3) 吉田孝志、海野勇三（2009），実践記録:中学校体育科におけるオリンピック教育の試み，教育実践総合センター研究紀要（27）：59-70.
- 4) 井上雅規（2012），小学校の教科課程にオリンピックの学習を位置づける，体育科教育7月号：22-25.
- 5) OVEP（Olympic Value and Education Program）ツールキット「AN OLYMPIC EDUCATION TOOLKIT」は、以下のURLよりダウンロードできる。  
[http://www.olympic.org/Documents/OVEP\\_Toolkit/OVEP\\_Toolkit\\_en.pdf](http://www.olympic.org/Documents/OVEP_Toolkit/OVEP_Toolkit_en.pdf)（2014年12月6日現在）
- 6) Deanna L. Binder et al.（2007），Teaching Values An Olympic Education Toolkit. International Olympic Committee. Switzerland.
- 7) 舛本直文（2012），「オリンピック教育」の今日的課題，体育科教育7月号：14-17.
- 8) 木村華織、黒須雅弘、田中望、出口順子（2015），「競技祭」を教材としたオリンピック教育の実践教育活動—「とうがく競技祭2014」実践報告—，東海学園大学研究紀要第20号人文科学研究編：157-175.

## 巻末資料1 【古代スタディオン走細案】

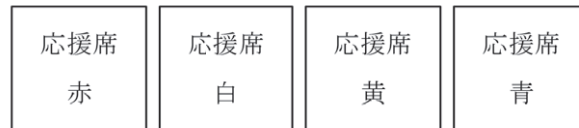
プログラム [ 2 ] 番 競技名 [古代スタディオン走]

### 【配置図】



ゴール後はバックストレートを通して応援席へ

各応援席で靴を脱いで裸足になってから招集場所へ



### 【ルール（減点、失格など）】

（スタート方法）

- ・ バーから足が出ないように両足を揃えて立つ
- ・ ヒモに触れないように腕を伸ばす
- ・ 体の前のロープが落ちたらスタートする

（失格）

- ・ フライニングは1回目で失格
- ・ 他のコースを妨害したら失格

### 【得点】

各レース 1位：4点  
2位：3点  
3位：2点  
4位：1点

巻末資料1 【古代スタディオン走細案】

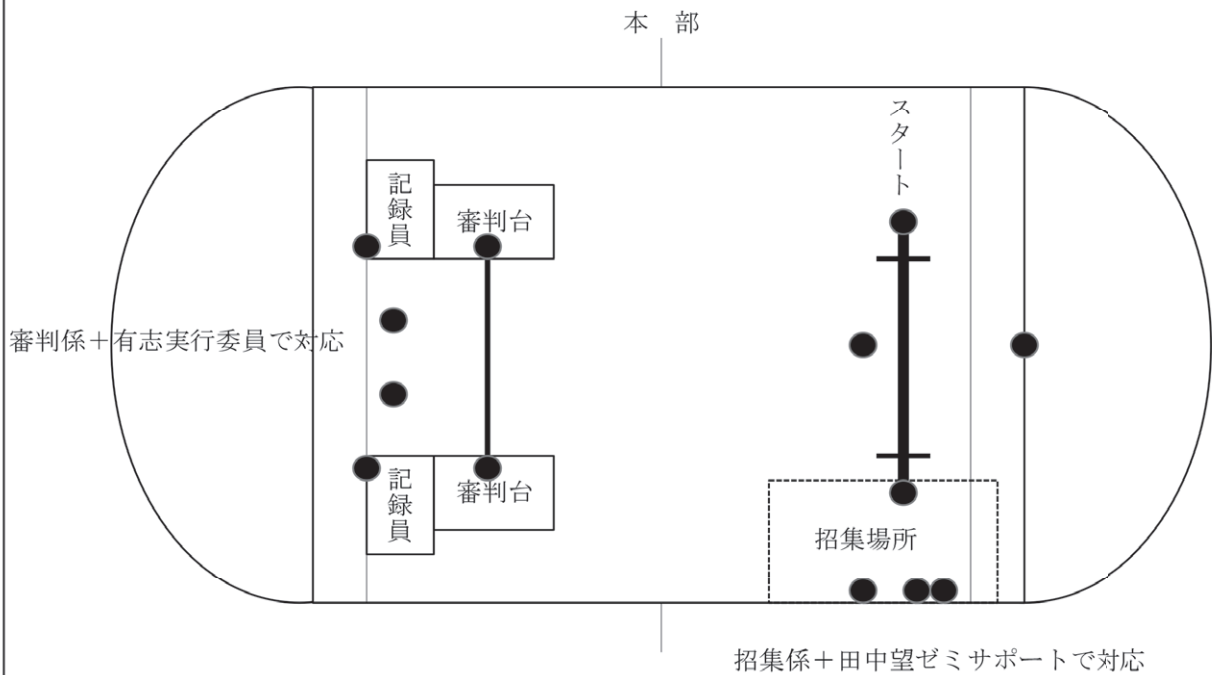
【招集場所での並び方】

- ・ スタートリストに従い、組ごとに並ぶ.
- ・ 初めに、男子の1～6組目までが整列する.
- ・ 次に、男子の7～12組目が整列する.
- ・ その後、女子の1～6組目が整列する
- ・ 学生の実競技終了後、教職員レースを実施（希望者）
- \* 各自、自分の出場するレースの組及びレーンを確認してくること.
- \* 招集係の指示に従い、迅速に集合・整列をする.

【ゴール後】

- ・ ゴール後は、自分のレーンに残り順位が確定してから解散すること.
- ・ 審判の指示に従って、移動すること.

【役員配置】



## 巻末資料2 【開閉会式細案及び葉冠作製について】

### 1. 開会式の概要

#### (1) 当日のプログラムと必要人員

##### [プログラム]

1. 集合・整列（アナウンス）
2. 開式の辞
3. オリンピック賛歌
4. 競技祭に関する説明（実行委員）
5. 学部長挨拶
6. 選手宣誓
7. 準備体操
8. 開式の辞

##### [整列]

本部を中心に各団、ゼミごとに整列

##### [必要人員]

- ・アナウンス  
(開式の辞、閉式の辞、式の司会進行)
- ・競技会の目的、趣旨説明(実行委員)
- ・学部長挨拶(学部長)
- ・選手宣誓(各団団長)
- ・音響

#### (2) 開会式の詳細

##### ■ 集合

アナウンス「開会式を行いますので、選手のみなさんは団長に従って所定の位置に集合してください」。

##### ■ 開式の辞

アナウンス

「ただいまより、平成26年度スポーツ健康科学部学部行事『とうがく競技祭2014』を開催いたします」

##### ■ 実行委員挨拶（競技祭の目的、各競技の目的、ねらい）

—実際の挨拶文—

おはようございます。今年2014年は1964年東京オリンピックが開催されてから50年の節目。そして2020年オリンピック・パラリンピック開催都市が東京に決まった日本国内だけでなく世界的にもオリンピック・パラリンピックに注目が集まった年です。そこで、今回の学部行事では、これまでの「運動会」からオリンピックに関連する種目や要素を取り入れた「競技祭」を開催することとなりました。

今日の競技祭では4つの種目を用意しました。1つめはスタディオン走、これは古代オリンピックで行われていた、現在の短距離走につながるものです。そしてこのスタディオン走には、フライングを防止するために厳しいルールがありました。これを体験し、フェアについて学んでいただきたいと思います。2つめは綱引きで、チームワークを深めていただきたいと思います。3つめは、芸術競技・ダンスです。身体活動と芸術的要素の融合である、ダンスを全員でする



## 巻末資料2 【開閉会式細案】

ことで、躍動感を演出したいと思います。ダンスのフリは我々、実行委員が、みなさんにレクチャーします。最後の競技は、色別リレーです。競争することの楽しさを体験していただきます。

以上の4つの種目を行い、過去から現在まで引き継がれているオリンピック精神を肌で感じていただきたいと思います。

### ■ 学部長挨拶

アナウンス「学部長の村松先生より、あいさつをいただきます」

### ■ 選手宣誓

アナウンス「続いて、選手宣誓を行います。赤団団長 小池くん 白団団長 升形くん 黄団団長 吉田くん 青団団長 丸山くん」お願いします。

「宣誓 私たちは、すべての選手の名において、スポーツの栄光と、チームの名誉のために、フェアプレーの精神を大切にし、ルール違反をしないよう、とうがく競技祭2014に参加することを誓います。平成26年11月20日」

### ■ 準備体操（二人一組）

### ■ 閉式の辞

アナウンス「以上をもちまして開会式を終了します。」

## 2. 閉会式

### (1) 当日のプログラムと必要人員

[プログラム]

1. 集合・整列（アナウンス）
2. 開式の辞
3. 成績発表
4. 葉冠授与（オリンピック賛歌）
5. 学部長挨拶
6. 開式の辞
7. 整列

[整列]

本部を中心に各団、ゼミごとに整列

[必要人員]

- ・アナウンス  
(開式の辞、閉式の辞、式の司会進行)
- ・成績発表（実行委員）
- ・葉冠授与（学部長、実行委員）
- ・学部長挨拶（学部長）

## 巻末資料2 【開閉会式細案】

### 3. 葉冠作成の想いと道のり

競技祭の優勝団への景品を決めることになったとき、昨年までの「運動会」と同じように1位の団には学食の弁当無料券、2位の団にはジュース無料券にしようと考えていたが、「そんなに簡単に決めてしまっているのか」とか「古代オリンピックの世界観を表現しているこの競技祭の景品がそんなものでいいのか」という話になった。ならばどうすればいいのかと話し合っていたところ「オリンピックの表彰式で優勝者に贈られている、葉冠を作ればいいのか」という意見がでた。それはオリンピックを題材にした今回の競技祭にふさわしいという考えでまとめ、優勝の景品は葉冠ということに決まった。

しかし、その葉冠をどのように作るのか、非常に悩んだ。インターネットで葉冠を取り寄せようと思っても「これだ!」となるものがなく、花屋や100円ショップにも出掛けて検討を繰り返したが適当なものが見当たらなかった。どうしようと悩んでいたところ、同じゼミの学生のお母さんがフラワーアレンジメントに関わっているということが分かった。そこで、その学生のお母さんに協力してもらい、開閉会式担当のメンバーで早朝6時より大須にあるフラワー市場に向かった。さまざまな種類の花や葉冠を作ることができそうな造花がたくさんあった。その中にオリーブの造花があり、これを購入した。繋ぎ合わせ円にすると、まさに自分たちの思い描いていた葉冠になった。作る個数は、優勝団の各ゼミ長に贈呈する4つ。余った造花で、スタディオン走で1位になった選手に送るオリーブのブレスレットを作成した。

作るのは非常に時間がかかったが、その葉冠を身に付けて、写真を撮っている1年生を見ると、大きな喜びを感じることができた。

巻末資料3 [活動スケジュール]

「競技祭」 スケジュール/作業工程表 担当部署 ( スタディオン走 )

日程	全体スケジュール	各部署スケジュール			
		用器具	招集	審判	開閉開式
10月13日: (月)					
14日: (火)		第1回試作		ルール・点数の決定	競技祭の説明文作成
15日: (水)		(空き時間に次の方法を考える)	スタートリスト入力	組数の決定	
16日: (木)		↓	↓		
17日: (金)					
18日: (土)		↓			
19日: (日)					
20日: (月)					
21日: (火)		第2回試作		ゴール判定方法	選手宣誓文・実行委員挨拶文
22日: (水)					
23日: (木)					
24日: (金)			↓		
25日: (土)			シート入力完了		
26日: (日)					
27日: (月)			ゼミ担にスタートリストを配布		
28日: (火)		スタート装置作成	他部署の手伝い	判定方法確認	葉冠作成開始・BGMの作成
29日: (水)		↓	↓	他部署の手伝い	↓
30日: (木)					葉冠買い出し
31日: (金)					
11月1日: (土)					
2日: (日)					
3日: (月)		↓			
4日: (火)	合同ゼミナール (細案の確認など)	スタート装置完成			式全体の流れを確認
5日: (水)					
6日: (木)					
7日: (金)					
8日: (土)					
9日: (日)					
10日: (月)					
11日: (火)	全体リハーサル (グラウンド)	スタート装置リハーサル	招集の流れの確認	ゴール判定調整	体換の決定
12日: (水)					
13日: (木)					
14日: (金)					
15日: (土)					
16日: (日)					
17日: (月)			↓	↓	葉冠完成・挨拶文等の修正
18日: (火)	各種目の最終調整		各部署の最終調整		
19日: (水)	前日準備				
20日: (木)		競技祭当日			